研究成果報告書（本編）

平成 29 年度札幌国際大学奨励研究費

「平安時代の国際関係史料の調査
とその翻刻による研究基盤整備
（報告書一本編）」

平成 30 年 3 月

研究実施者 篠崎 敦史（人文学部現代文化学科助教）

研究期間 平成 29 年 6 月 15 日～平成 30 年 3 月 31 日

1、研究の概要

i) 研究目的

本研究は、平成 29 年度札幌国際大学奨励研究に基づき、平成 29 年 6 月 15 日～平成 30 年 3 月 31 日の間、行われたものである。

なお、本報告書は、研究期間内における活動を中心に記載し、調査対象の学術的、書誌学的、研究成果に関わるものについては別途、論文などの形で発表する。

本研究の目的は、宮内庁書陵部所蔵の『水左記』の自筆本と、東京大学史料編纂所所蔵の『日本運上録』の調査を行い、これを通じて、両史料の翻刻、活字化の前提の作業を実施するとともに、関連する史料を収集し、それに関わる論文執筆を行うことを目的とする。これを通じて、平安時代の日本と東アジアの豊かな歴史、関係を浮き彫りになると考えている。

本研究の最大の意義は、従来、存在は知られていたがその本文が翻刻されておらず、研究者が容易にアクセスすることができなかった史料について、その問題を解消し、以後の研究の基盤を整備することにある。

ii) 本研究の着想に至る経緯

本研究の着想に至る経緯と研究開始前の準備状況であるが、研究実施者がかつて

①「高麗王文宗の「医師要請事件」と日本」（『ヒストリア』248、2015 年）

②「10～11 世紀の日宋交渉と入中僧」（『ヒストリア』255、2016 年）

の 2 つの論文を発表した際の事前調査を基礎とする。

①の執筆時、本研究の調査対象の『水左記』自筆本を宮内庁書陵部に調査に行き、②の際は、もう一つの調査対象の『日本運上録』を実見しに行った。しかしいずれの場合も、調査に十分な時間や複

写を確保することができなかった。

そのため、本研究でより詳しい調査と、上記目的のための環境整備を行うことが必要と判断し、応募した次第になる。

iii) 研究対象について 1—『水左記』

以下、本研究が対象とした二つの史料—『水左記』と『日本運上録』についての基礎的知見について記述する。なお、下記の知見は基本的に先行研究においている(後掲の参考文献一覧参照)。

『水左記』は、平安中期の公卿、源俊房(1035～1121)の日記である。

本史料の最大の価値は、俊房の自筆本が一部現存していることと同時に、11世紀後半におきた日本と高麗の外交交渉に関わる記述がみえる点にある。これは日本史のみならず、世界史的観点からも極めて希有な史料といえる。とりわけ、高麗の王を「高麗皇帝」と記しており、日本のみならず、当該期高麗がいかなる自尊意識や対日観を持っていたのかをさぐる上で重要な位置にあるものといえる。一方、本史料の問題点としては、『史料大成』が未収録の記事があるという点に求められる。特に前述した高麗との外交に関わる部分は、自筆本にあるにも関わらず、『史料大成』などが翻刻していないものがある。そのため、日麗交渉については刊行されている書籍からではその全容が追えず、自筆本をみななければならない部分が存在しているのである。

調査の前提となる『水左記』の全容であるが、田島公「文庫論」(『岩波講座日本歴史 第22巻 歴史学の現在』所収、2016年、岩波書店)に拠れば、日次記7巻と別記1巻が残存しているとのことである。その内訳であるが、

① 康平7年(1064)上・下—書陵部(伏見宮本)

② 承保4年(1077)下—尊経閣

③ 承暦 4 年 (1080) 上・下 一書陵部 (柳原家本)

④ 承暦 5 年 (1081) 下 一尊経閣

⑤ 永保 4 年 (1084) 上 一書陵部 (伏見宮本)

⑥ 永保 4 年 (1084) 別記 (正月任大臣大饗) 一書陵部・伏見宮

となる。本研究が対象、調査したのは、前述した日麗交渉について記述された「書陵部(宮内庁書陵部)」所蔵本であり、上記の①、③、⑤、⑥となる。

書陵部が所蔵している『水左記』の伝来過程であるが、田島氏によれば、南北朝前期に北朝の持明院統、室町時代前期に伏見宮家が収蔵していたが(一部は蓮華王院が持っていたそうである)、江戸時代中期から後期にかけて、前田家と柳原家に渡り、現在、書陵部と尊経閣が所蔵するようになったとのことである。特に③の柳原家本は、宮内庁に伝領した経緯に不明な点が残るものの、おそらく 1927 年に宮内省(名称は当時のもの)の所管になったと推測されている。本研究で実施者が東京の宮内庁書陵部図書寮に調査に出向き、そのための予算を計上したのはこれが理由による。

iv) 研究対象について 2—『日本運上録』

次に『日本運上録』であるが、これは詳細が不明の史料である。現在のところ、東京大学史料編纂所所蔵の本しか確認されておらず、写本なども含め、「いつ、どこで、誰によって書かれた」など、その書誌学的情報はほぼ皆無である。そのため、これについても東京大学への調査が必須と考え、旅費を予算として要求した。

本史料の重要な点は、11 世紀初頭、宋から牒が来たとの記事があり、これを伝える唯一のものであるという点にある。これが平安時代の日宋関係を考える上で貴重な情報であることは間違いがない。一方で、従来、『日本運上録』が詳しく調査されたことがなかった。そのため、これに記された情報がどの程度の信憑性があるのかすら不明で、先にみた 11 世紀初頭の宋からの牒も、果たして史実なのかどうかも曖昧である。この問題点を解消するためには、『日本運上

録』の詳しい調査が必要であると考え、そのための調査を実施した次第になる。

2、要求した予算額とその用途について

本節では本研究のために札幌国際大学に要求した予算額と、その用途、理由、残金などについて述べる。実施者が要求した額と、出費、残金は下記になる。

	予算額	支出	残金	備考
旅行交通費	150000円	122760円	27240円	
雑費（アルバイト含む）	38000円	0円	38000円	使用せず
雑費（文献複写費）	50000円	25383円	24617円	
図書費	50000円	31104円	18896円	
合計	288000円	179247円	108753円	

i) 旅行交通費について

本予算の目的は、『水左記』、『日本運上録』の調査のため、北海道（新千歳空港）から、所蔵機関のある東京（宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所）にまで行くためのものである。

両史料の調査は、平成29年8月22日から25日にかけて行った。

宿泊施設は全日「スーパーホテル Lohas 東京駅八重洲中央口」であった。調査の概略は、

- ・ 8月22日 北海道を出発。東京着。のち、宮内庁書陵部で『水左記』の調査
- ・ 8月23日 宮内庁書陵部で『水左記』の調査
- ・ 8月24日 東京大学史料編纂所で『日本運上録』の調査
- ・ 8月25日 東京大学史料編纂所で『日本運上録』の調査。東京から北海道へ

となる。

以上の日数は調査時間に過不足を発生させない適当なものであったと判断している。また、調査対象地近辺に宿泊できたことにより、移動時間による調査時間のロスを最小限にすることができた。さらに、本予算によって『水左記』自筆本(国宝)と写本、『日本運上録』原本を直接実見する形で調査を行うことができた。これを通じて、紙焼きなどでは確認できない部分や、所蔵機関より貴重な知見、助言を得ることができた。このほかに、調査対象の『水左記』を既に調査している研究実施者の知人の東京の研究者の助言、意見交換を行うこともできた。

そのため、上記の予算要求と支出は必要であり、適切なものであったと結論づけている。

ii) 雑費(アルバイトを含む)

本予算については、全く使用していない。当初、本予算を要求したのは、調査、複写した『水左記』、『日本運上録』の翻刻、テキストデータ入力の補助作業員を雇用するためであった。一方、これを実施しなかった理由は、自筆本などからの翻刻が当初想定していたよりも高度に専門的であるため、研究実施者が中心で翻刻を行い、その補助という形で作業を実施することが難しいと判断したために

なる。そのため、本予算については執行しなかった。

iii) 文献複写費について

本予算の目的は、『水左記』自筆本及び柳原本、『日本運上録』の複写を実施し、研究実写の本拠地で時間に余裕を持って調査する環境を整えることにあった。

支出の詳細は下記になる。

- ・『水左記』の複写(自筆本のカラー複写、柳原本複写含む)・・・19592円
- ・『日本運上録』の複写・・・5791円

上記の複写により、研究実施者の研究拠点、生活拠点などで、現地(宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所)などの調査の際は参照できなかった辞書、関連史料などをつきあわせた文字の調査が可能になった。そのため、本予算の要求、支出は必須であったと考えている。また、若干の残額が出たが、これは過不足なく複写を行うために発生したものであり、適切な予算要求であったと判断している。

iv) 図書費について

本予算の目的は研究に必須の書籍、工具書をそろえることにあった。実際の使途としては、

- ・前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成六五 水左記』(二〇一七年、八木書店) 一30248円
の購入がある。

本書籍を購入した理由は、『水左記』自筆本の影印であり、調査対象の『水左記』自筆本の文字を調査する際、記主の書き癖、類似の文字、当て字などを調べる点にある。なお、当該書籍は、前述した尊経閣所蔵の『水左記』に関する影印であり、調査対象の宮内庁書陵部所蔵の『水左記』自筆本は含まれていない。そのため、本研

究の調査目的、意義は本書籍の出版、購入によって損なわれていないと判断している。

このほか、若干の予算の余裕はあったが、調査、翻刻に必要な書籍は、研究実施者の所属機関(札幌国際大学附属図書)の所蔵書籍、近隣の研究機関、公共図書館、また研究実施者の私物によって対応することができた。そのため、前述の書籍以外は購入せず、予算が若干余ったのは、これが理由による。

3、研究実施期間の活動と成果について

i) 研究実施期間

本研究は、平成29年6月15日～平成30年3月31日実施された。

この期間内の研究活動は、主に下記の三段階になる。

①平成29年6月15日～8月21日—事前準備、関連史料・先行研究の収集

②平成29年8月22日～25日 —東京での文献調査

③平成29年8月26日～平成30年3月31日—翻刻、学会報告、論文執筆、報告書作成

ii) 研究実施期間の活動

①平成29年6月15日～8月21日—事前準備、関連史料・先行研究の収集

奨励研究の審査合格通知を受け、『水左記』、『日本運上録』の調査の事前準備を行った期間になる。

主な活動は、関係する論文調査と、史料の打ち込みになる。その成果は、本報告書末尾に掲載した。また、この期間、研究実施者と指導関係ないし、交友関係にある日本史研究者の助言などを受けるため、大阪市立大学、京都大学などを訪問した。

②平成29年8月22日～25日—東京での文献調査

『水左記』、『日本運上録』の調査のため、東京に滞在していた期間になる。

この期間は基本的に宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所での文献調査と複写が中心になる。

この活動によって、『水左記』自筆本(国宝)を直接実見し、その裏書の状態などを確認した。以前の調査では自筆本の紙焼きしかみていなかったが、今回、自筆本を直接確認したことで、調査対象の記事の裏書きの前後関係、記述のやり方などを直接確認することができた。また、『日本運上録』では、以前の調査のマイクロ(白黒)では判別できなかった朱書きなどのカラー部分や、途中で筆跡が変化していることなど、貴重な成果をうることができた。

このほかにも、一部日程で研究実施者が交友関係にあり、先行して『水左記』の翻刻を実施していた人物と意見交換を行った。これにより、研究実施者が翻刻の際の誤字が分かるなど、研究上重要な指摘がなされた。さらに現地で調査した際、所蔵機関の方より、『日本運上録』の表紙の印が尊経閣のものであり、前田家経由ではないか、との貴重な意見をもらうことができた。研究実施者が知る限り、『日本運上録』を使用した先行研究でこの点が指摘されたことはない。本情報は現地に行かなければ分からないものであると同時に、今後の研究に極めて有益な情報であったと判断している。

③平成29年8月26日～平成30年3月31日一翻刻、論文執筆

この期間は、東京での調査をふまえ、『水左記』、『日本運上録』の翻刻と、その調査による論文執筆、学会報告や、報告書の作成を行った期間になる。

iii)研究成果について

本研究成果であるが、翻刻は『水左記』はほぼ完了、『日本運上録』は、外交関係に関わる部分のみ、翻刻が一部完了している、となる。論文については二本が成稿済みで、学会報告も一つ実施した。

ただし、翻刻、論文については報告書作成時点(平成30年3月31日)で未発表である。これは下記の事情による。

まず、『水左記』と『日本運上録』の翻刻であるが、本研究はこれを広くその成果を公表し、以後の研究の基盤とすることを目的としている。本来、報告書作成時点までに本報告書や、学術誌などなどにその成果を掲載すべきであったが、

・ 翻刻の発表には、所蔵機関の許可が必要で、その問題をクリアーにできていない点

・ 『水左記』については、一部の字句がまだ読解できておらず、現段階での公表は学術的に時期尚早と判断

・ 『日本運上録』については、翻刻、文字の読解はおおむね出来たが、本史料がいつ成立したか、作者は誰かなど、発表に耐えうる書誌学的情報が特定できなかったこと

などを総合的に鑑み、軽々に成果公表するよりも、学術的に耐えうる段階で公表すべきと判断した。そのため、本研究の成果を基礎に、以後も作業を続けていくつもりである。

奨励研究期間に作業を終了することができなかったのは、研究実施者の見通しの甘さに起因するものも含まれるが、類似の作業、十分な先行研究があまりないという環境下において、1年に満たない研究期間では、ある程度、やむを得ないものであると考えている。

次に本研究を基礎にした、ないしそこから派生した論文、学会報告であるが、

・ 論文・・・2本(成稿済)

・ 学会発表・・・「平清盛・後白河法皇の対宋外交の歴史的位置(平成30年3月23日)」

となる。

論文二本については、既に成稿済みで、発表媒体などを考慮中である。基本的に外部への査読誌への投稿を考えている。これは学内奨励研究という形ではあるが、その成果をできる限り広く、多くの人がアクセスしやすい媒体に公表すべきであると判断したからである。

以上が、平成 29 年度奨励研究の活動報告になる。

なお、末筆ではあるが、本研究の調査に協力していただいた宮内庁書陵部図書寮、東京大学史料編纂所をはじめ、関係各所に厚く御礼申し上げる。

附節 参考文献と参考史料について

<主要参考文献>—本研究で直接参照したものに限った。

奥村周治「医師要請事件にみる高麗文宗朝の対日姿勢」(『朝鮮学報』117、1985年)。

木宮泰彦『日華文化交流史』(1955年、富山房)。

倉本一宏編『日記・古記録の世界』(2015年、思文閣出版)。

近藤剛「『朝野群載』所収高麗国礼賓省牒状について」(『中央史学』34、2011年)。

下向井龍彦「『水左記』にみる源俊房と薬師寺」(古代学協会編『後期撰関時代史の研究』所収、1990年、吉川弘文館)。

田島公「海外との交渉」(橋本義彦編『古文書の語る日本史2 平安』所収、1991年、筑摩書房)。

「文庫論」(『岩波講座日本歴史 第22巻 歴史学の現在』所収、2016年、岩波書店)。

橋本義彦「古記録の伝来」(『日本歴史「古記録」総覧 下巻』所収、1990年、新人物往来社)。

平林盛徳「水左記」(『日本歴史「古記録」総覧 上巻』所収、1989年、新人物往来社)。

前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成 65 水左記』(2017年、八木書店)。

桃裕行『桃裕行著作集第4巻 古記録の研究(上)』(1988年、思文閣出版)。

『桃裕行著作集第5巻 古記録の研究(下)』(1989年、思文閣出版)。

山中裕編『古記録と日記 上・下巻』(1993年、思文閣)。

『国宝水左記』(2013年、勉誠出版)。

拙稿「高麗王文宗の「医師要請事件」と日本」(『ヒストリア』248、2015年)

「10～11世紀の日宋交渉と入中僧」(『ヒストリア』255、2016年)

<参考史料>

- ・主に『水左記』調査のため、関連史料を集めたものになる。『続資治通鑑長編』にみえる医師の往還など、直接的関係の薄いものは省いた。この部分は拙稿「高麗王文宗の「医師要請事件」と日本」(『ヒストリア』248、2015年)を参照のこと。
- ・一部返り点など、研究実施者が読めなかったもの、読みに不安が残る部分については無理に返り点をつけていない。
- ・『日本運上録』関係史料については報告書本論で述べたように、直接関連すると思われる史料が皆無である。掲載がないのはこのためである。

史料『日本書紀』允恭天皇三年正月辛酉朔条

遣_レ使求_二良医於新羅_一。

史料『日本書紀』允恭天皇三年八月条

医至_レ自_二新羅_一。則令_レ治_二天皇病_一。未_レ経_二幾時_一、病已差也。
天皇歎之、厚賞_レ医以帰_二于国_一。

史料『高麗史』文宗二十七年七月丙午条

(上略) 東南海都部署奏、日本国王則貞・松永年等四十二人来、
請_レ進_二螺鈿鞍・橋刀・鏡匣・硯箱・櫛書・案画屏・香炉・弓箭・
水銀・螺甲等物_一。尙岐島勾当官遣_二藤井安国等三十三人_一亦請_レ
献_二方物東宮及諸令公府_一。制許_下由_二海道_一至_上京。

史料『高麗史節用』文宗二十七年七月条

(上略) 東南海都部署奏、日本国人王則貞・松永年等四十二人来、
請_レ進_二土物_一。尙岐島勾当官遣_二藤井安国等三十三人_一亦請_レ献_二
土物_一。制令_下由_二海道_一至_上京。

史料『朝野群載』卷二十 異国 高麗牒

高麗国礼賓省牒 大日本国大宰府

当省、伏奉_レ聖旨_レ訪聞、貴国有_レ能理_レ療風_レ疾医人_上。今因_レ商客
王則貞廻帰次_レ、仰、因_レ便通_レ牒、及_レ於_レ王則貞処_レ、説_レ示風疾
緣由_レ。請_レ彼処_レ、選_レ扱上等医人_レ、於_レ来年早春_レ、發送到来。
理_レ療風疾_レ、若見_レ功效_レ、定不_レ輕酬_レ者。今先送_レ花錦_レ、及大
綾・中綾各一十段、麝香一十臍、分_レ附王則貞_レ、賚持将_レ去_レ知
大宰府官員処_レ、且充_レ信義_レ。到可_レ収領_レ者。牒具如_レ前。当省
所_レ奉聖旨、備録在_レ前。請貴府若有_レ端的能療_レ風疾_レ好医人_上、
許容發送前来、仍収_レ領疋段麝香_レ者。謹牒。

<当_レ承曆三年_レ>

己未年十一月 日牒

少卿林 既木

生

卿崔

卿鄭

史料『水左記』承曆四年八月七日条

晴。今日以後三箇日博陸御物忌也。

今日积奠祭也。上卿左衛門督。左大弁参入云々。又有_レ宴座_レ。

題云、徳洽_レ民心_レ<尚書>。序文章生基親云々。

藏人弁伊家来下宣旨二枚。

一枚<伊勢豊受大神宮祢宜神主等与_レ前司広経朝臣_レ愁申年□
事。副_レ度々宣旨并神主等申文_レ。仰令_レ定申_レ>

一枚<高麗国牒送申_レ医師_レ事。仰以_レ王則貞陳状_レ令_レ定申_レ>
後聞、此日法成寺有_レ穢云々。或人云、阿弥陀堂承仕法□檐下□
□納骸骨之櫃。奇異事也。仍令_レ申_レ殿之処_レ、被□□々々勘申可_レ
卅日穢_レ之由云々。

史料『帥記』承曆四年閏八月五日条

雨下。晚頭不_レ下。今日陣定也。仍酉刻参内。先_レ是、大宮大夫・左弁被_レ候_二陣座_一〈左衛門督参_レ候_二殿上_一云々〉。大宮大夫被_レ示云、至_二于昏黒_一人々不_レ参、甚難_レ堪事也。凡依_二人少_一令_レ奏_二其由_一之处、可_レ遣_二召右大臣_一者。秉燭之後、春宮大夫・右衛門督、次右大臣被_レ参。大宮大夫召_二蔵人弁_一〈参_二奥座_一。可_レ尋〉。被_レ奏_二人人故障、并如_レ此大事人少何様可_レ候之由_一。仰云、早可_二定申_一者。次被_レ奉_二文書於右大臣_一。々々々少々披見。被_レ示云、不_レ能_二忽見_一。令_二誦上_一欲_二定申_一者。仍被_レ下_二左大弁_一、々誦之〈微音。不_二詳聞_一之〉。先被_レ定_二伊勢豊受太神宮祢宜訴申自_一正月_一至_二五月_一所供神膳年魚代闕怠事_上。左大弁発語、如_レ誦_二本国解并神主解状_一、無_二別定詞_一。若練習之所_レ致歟。次右衛門督定申云、如_二国司申_一者、殊無_二過殆_一。仍任内宮神主請取例。外宮神主可_レ請_二取其代物_一之由、可_レ被_二仰下_一歟。左衛門督同_レ之。予定申云、如_二広経朝臣陳申_一者、件深長茅原田依_レ本為_二公田_一。注_二前司公盛朝臣例_一歟。彼地子切_二宛件鮎代_一之由、言上之日、豫蒙_二裁許_一了。而依_二神主訴_一更可_二改切_一之状被_レ下_二宣旨_一了。随改_二切給国符_一之处、内宮神主不_レ請_二切文_一。非法過差責_二取見米并祓料_一。不_レ請_二切文_一、不_レ取_二見米_一、称_レ可_レ有_二過差祓物等_一。仍預了。外宮神主給_二見米_一、忽切_二行於在庁官人等_一、罷上已了者。以_レ之言_レ之。国司殊過殆歟〈非法責_二取見物_一、并不_レ申_二公家_一於徵_二祓物_一。尤不_二穩便_一歟〉。不_レ請_二料物_一已致_二闕怠_一。其咎又在_二誰人_一乎。縱雖_二神人_一、於有_二其咎_一。神明何不_二監察_一乎。然則令_二請取_一不_二請取_一、可_レ令_二返給_一請_二過料於国司_一歟。慥被_レ尋_二問闕怠_一之後、実以闕怠者、可_レ被_二謝申_一歟。若被_レ処_二神人過殆_一者、者相_二尋先例_一可_レ被_二量行_一歟。次被_レ処_二神人過殆者々_一。人々大略被_レ同。次官問_二注王則貞_一事。左大弁定申可_レ遣_二医人_一之趣。右衛門督定申不_レ可_レ遣由。左衛門督同_二左大弁_一。予定申云、件事旁依_二多疑_一、召_レ上付_二送高麗国_一牒状_上本朝商客王則貞被_二覆問_一了。但太宰府解云、彼国伝_二聞太宰府有_一良医_一、可_レ被_二渡送_一

之由、所_レ牒示_レ也者。而今不_レ覆_レ問其旨、頗不審也。抑高麗之於_レ本朝也、歷代之間久結_レ盟約。中古以來朝貢雖_レ絶、猶無_レ略心。是以若有_レ可_レ牒送_レ者、彼朝申牒、本朝報示。今當_レ斯時、為_レ療_レ病痾_レ申_レ請医人_レ之。其由給_レ蓋被_レ裁許_レ乎。若於可_レ遣者、除_レ上臈医_レ之外可_レ選_レ遣一兩_レ歟。獨向_レ異土_レ多心籌之故也。且又可_レ被_レ召_レ問雅忠朝臣。又申請之後漸歷_レ居諸、彼病若平癒者、奈渡遣何。仍今度太宰府送牒、被_レ問_レ彼病病痾体并癒否、重隨_レ申請_レ可_レ渡遣_レ歟。兩個之議可_レ隨_レ勅定。又所_レ送_レ太宰府_レ方物等納否之条忽難_レ定申。其故者、天慶年中高麗国使下神秋連陳狀、彼国王愁_レ忽被_レ停_レ朝貢_レ之事_レ者、以_レ件方物_レ可_レ准_レ朝貢_レ者。忽乖_レ前議_レ可_レ難_レ容納_レ歟。然則被_レ尋_レ彼例、可_レ被_レ量行_レ歟。又彼国牒状多有_レ三通_レ云々。今有_レ一通。偏為_レ送_レ太宰府_レ牒状歟。被_レ尋_レ如此例等_レ可_レ被_レ牒送_レ歟。陸奥国司申請三ヶ条、一者今明神被_レ授_レ位階_レ被_レ寄_レ封戸_レ事。同前諸卿定申云、先被_レ尋_レ神名帳、慥被_レ相_レ尋彼明神位階_レ之後、可_レ被_レ裁許_レ歟。一者被_レ許_レ延任_レ事。彼国有_レ亡弊声。而已今興復者、可_レ被_レ裁許。一者被_レ下_レ宣旨_レ与_レ前司_レ同人官人相共受_レ領官物_レ事。同前諸卿定申云、可_レ遣_レ詔使_レ者。左大弁書了。大略読_レ之卷_レ之結_レ之。次大納言信被_レ退出_レ了。次藏人弁就_レ膝突。奏_レ下宣旨於右大臣。唐人孫忠愁状云々。次有_レ除目_レ事。右府被_レ奉也。帥被_レ補_レ権_レ申請云々。掃部助平・季良<藏人>、右近少将源俊頼<左大将被_レ任之日被_レ補_レ左近。今日如_レ本補_レ右也>。別當書_レ除目。此間予退出了。

史料『水左記』承曆四年閏八月五日条

自_レ夜雨下。朝間如_レ沃。午剋以後快晴。巳剋許令_レ申_レ博陸_レ云、今日高麗国申_レ醫師_レ事可_レ令_レ定申也。而右大臣・内大臣共称_レ有_レ憚不_レ被_レ参。如何可_レ候哉。上臈雖_レ不_レ被_レ参可_レ定申_レ歟者。御返事云、早令_レ奏_レ此由_レ可_レ被_レ隨_レ仰也者。招_レ藏人弁伊家_レ令_レ奏_レ此旨。頃之伊家以_レ書状_レ伝_レ仰云、右大臣可_レ被_レ参之由可

遣仰也者。（中略）又、高麗国□□賓省送牒申請医人、可遣否。若可遣者誰人乎。又、□□返牒其行事等条、右大弁以下□□遣之由。下官申云、医人条須差遣雅忠□也。然而道之匠、朝之簡要也。遠遣異鄉、尤有□憚。忠康朝臣累代名家門業相伝。又、俊道朝臣□□道已為宿老。件兩人之間可差遣歟者。
（下略）

史料『水左記』承曆四年閏八月八日条

陰晴不定。未剋許藏人弁伊家来、付陣定文〈伊勢豊受宮祢宜申事。高麗国申醫師事。陸奥国司□事〉并榎並庄文書。所々請文等、示可奏之由了。（下略）

史料『水左記』承曆四年閏八月十一日条

晴。未剋許藏人弁伊家持来去八日所付定文并榎並庄文書等云、仰云、高麗国申請医人条、依有事疑召上付送牒状商量□王則貞復問已了。而於太宰府如陳状者、醫師聞經□鎮西之由、彼国所牒示也。又、於官如陳申状者、醫師聞在皇□由所語彼国也者。陳申之旨、已有相違。重令問則貞。（下略）

史料『水左記』承曆四年閏八月十三日条

（上略）又、送重問注王則貞申詞記錄〈副本文書等〉。予举申、如仰明日可參仕也。又、問則貞記早為令奏聞返遣了。

史料『帥記』承曆四年閏八月十四日癸酉

（上略）次右大臣被渡文書於大宮大夫云、宋朝商客孫忠持參錦綺、可被納歟。若被納者、可有答信物歟者。又、高麗国申請医者可遣歟。若可遣者可遣誰乎。又、可被副別使歟。可被定申者。次各定申、

右兵衛督發語定申云、大宋国錦綺事、近来有_下被_二尋問_一之事_上者。一定之後可_レ被_二量行_一歟。次人々同_レ之。予定申云、大国皇帝被_レ獻方物、早被_二交納_一於_レ事可_レ穩。但件事近日有_レ被_レ尋_二問_一經平朝臣_上云々。然則經平朝臣弁申之後、可_レ遣_二返牒_一歟。至_二于答信物_一者、每度不可_レ返遣_二歟。次々人々大略被_レ同_レ之。左大弁執筆書_レ之。次被_レ定_二医事_一。右兵衛督定申云、尤雖可_レ遣、無_二効驗_一為_レ朝可_レ為_二其恥_一。仍不可_レ遣何事之有歟。次右大弁定申云、猶可_レ遣歟。左京大夫源宰相中將同_レ之。次右衛門督定申云、大略相同_二右兵衛督定申_一。於_レ不可_レ遣、牒状者、可_レ渡_二送医_一已臨_二老爛_一、難_レ遣之由、可_レ載_二牒状_一歟<老爛之詞無_二由事_一歟>。次新中納言同_レ之。次予定申云、先日合議之時、可_レ遣_二一兩_一之由定申已了。若猶可_レ遣者、主女正俊・通久携_二其道_一。頗當_二此仁_一。至_二于余人_一忽難_二量申_一。可_レ被_レ尋_二問_一雅忠朝臣_上歟。副_二遣別使_一何難之有乎。但件王則貞所_レ陳縱橫、難_二信受_一者。太宰府相副如_二此商客一人_一之由可_レ被_二下知_一歟。若於_レ不可_レ遣_レ医条者、如_レ此沙汰往反之間、自歷_二居諸_一。仍今度被_レ尋_二病癒否_一、隨_二重申請_一可_レ被_二渡遣_一歟。次春宮大夫申云、不可_レ遣尤無_二其義_一歟。仍遣_二俊通一人_一、何難之有乎。次右大將被同_二予議_一。次大夫被定申云、俊通・忠康之間可_レ定遣_二歟。右大臣被同_二別當之議_一。次書了。大略誦上。次召_レ史給_レ硯。次人々退出<時及_二曉鐘_一>。

史料『水左記』承曆四年閏八月十四日癸酉

(上略) 今日陣定也。未終着_二束帶_一參内。(中略)頃之人々着陣。被_レ仰云、大宋国皇帝付_二孫忠_一被_レ獻_二錦綺等_一、可_レ被_二安置_一否。若可_レ被_二安置_一者遣_二返牒并答信物_一歟。又若不可_レ安置_二者、可_レ遣_二其由返牒_一如何<被_レ下_二本錦等注文并度度定文・諸道勘問等_一>。又高麗国口_二請医人_一事可_レ遣乎否。若可_レ遣者、以_二一人_一可_レ遣歟。將差_二遣二人_一歟。又付_二王則貞_一可_レ差遣_二歟、相_二副別使_一可_レ遣歟。又可_レ遣返牒奈何<被_レ下_二本牒状・兩度定文・問日記等_一>。先定_二申大宋事_一。人々申云、如_二前度定申_一、固封

書大弑經平朝臣不令口孫忠所_レ申也者。披_レ見件文_レ之後可_レ定_レ申一定_レ也。就中前度所_レ遣答信物納狀籠彼封書中歟。旁以不審也。又件口可_レ經平朝臣旨定申先了。而今經平朝臣已以上洛、早被_レ問_レ彼朝臣_レ、隨_レ其申狀_レ可_レ定申_レ者。或亦申云、件錦早可_レ被_レ安置_レ也。又高麗医事。人々云、於不_レ遣者頗似_レ無_レ議歟。可_レ選遣_レ也。若可_レ遣者、須_レ遣_レ雅忠朝臣_レ也。然而如_レ前定申_レ、道之棟梁也。遙遣_レ異境_レ可_レ有_レ其憚_レ、至_レ于遣_レ自余輩_レ者。若不得_レ其療治之驗_レ者、為_レ朝尤可_レ為_レ恥辱_レ者。不被_レ差遣_レ何事之有乎。若為_レ如_レ定申_レ者、以_レ太宰府_レ返牒可_レ被_レ遣也。府雖_レ有_レ名医_レ、世已澆季。或寄_レ事衰老_レ申_レ不堪由_レ、或亦称_レ可_レ難_レ渡_レ蒼海_レ之旨_レ。然者不_レ能_レ差遣_レ之趣、注_レ載彼牒狀_レ可_レ被_レ遣_レ口。或亦申云、俊通・忠康間一人被_レ差遣_レ何事之有哉。予申云、事趣大略同_レ右大将定申_レ。但至_レ于醫師条_レ者俊通・忠康之間可_レ被_レ選_レ遣一人_レ之由定申先了。於彼此口者、被_レ問_レ雅忠朝臣_レ可_レ被_レ左右_レ歟。

新中納言申云、事趣同_レ前。若可_レ被_レ遣_レ医人_レ者、自_レ太宰府_レ口官人一人相_レ副則貞_レ可_レ被_レ遣歟。但為如不_レ達_レ天聽_レ。只以_レ自_レ府遣之趣_レ、可_レ被_レ令_レ知_レ彼国_レ也者。

事了及_レ曉人々退出。

史料『帥記』承曆四年閏八月二十二日条

(上略) 予参_レ四条宮_レ〈雖_レ為_レ御物忌_レ、今朝渡坐云々〉。殿下宣云、可_レ遣_レ高麗医_レ事。如_レ上達部定_レ、為_レ問_レ雅忠_レ召之處、日来称_レ所勞_レ由、今日又令_レ召。申云、已惱_レ腫物_レ。只今難_レ参_レ者、若可_レ然者。自_レ是可_レ遣問_レ者、可_レ遣_レ行家_レ歟如何。申云、自_レ殿遣問者、行家朝臣何事候乎。次召_レ行家_レ、遣_レ雅忠_レ許了。新中納言別当祇候、行家帰参申云、雅忠朝臣令_レ申云、件事先例不_レ候。今随_レ付_レ商客_レ牒狀_レ忽不_レ可_レ渡遣_レ歟。猶可_レ遣者俊通可_レ罷向_レ歟。又可_レ罷向_レ人不_レ候之中、二人猶罷向者、俊通定致_レ

向背_レ歟。是皆衆人所_レ知也者。殿下遣_二召伊家_一、被_レ奏_二雅忠申旨_一已了。予此間罷出了_レ〈於_二雅忠_一未此道之、雅忠所勞候間難_レ遣者也〉。

史料『水左記』承曆四年閏八月二十三日条

(上略)先_レ之博陸以_二書状_一被_レ示給_二云、高麗申医事。被_レ問_二雅忠朝臣_一之處、申云、此朝未_レ見_二如_レ此之事_一。雖_レ不_レ遣何事候哉。若尚可_レ遣者可_レ遣_二□□_一者、何様可_レ侍哉。可_レ然者示_二合西隣相公_一可_レ示_二給子細_一也。又□此小兒所_レ惱只同様侍。尤不便也者。予答申云、如_レ仰示_二合彼相公_一晚頭可_二參啓_一也。小兒御事極以不便也者。酉剋許參_二博陸_一。語給云、高麗申_二醫師_一事、依_二御氣色_一問_二雅忠朝臣_一之處、申云、此朝未_レ承_二如_レ此之事_一、不_レ遣何事候哉。若尚可_レ遣者□差_二遣俊通_一者。件医遣召之条依_レ難_二思慮_一、中心祈請一寢之間、夢中故宇治□高麗国中医不可□□由者。仍思止了也者。

今日季御読經始也。予不參。

史料『水左記』承曆四年閏八月二十四日条

陰。終日雨風。午剋以後殊甚。巳剋許博陸以_二書状_一被_レ示給_二云、高麗申_二請医人_一事、不_レ可_レ遣之由定了。仍其由返牒可_レ作之旨匡房朝臣奉_レ仰了。又小兒可_レ渡所不_レ侍。為之如何。師仲朝臣宅何事侍哉。今日雖物忌夕方可_レ參_二鴨院_一也者。予答申云、被_レ仰旨_二委承了。高麗返牒尤可_レ然之□□。小兒渡所事能々令_二相計_一給可令_二左右_一給歟。晚頭參入可_レ承_二今日_一也者。

未終匡房朝臣来、相逢言談。陳_レ可_レ作_二高麗返牒_一之旨_二、良久退出了。

晚頭欲_レ參_二博陸之處_一、今日八卦物忌也。仍差_レ使令_レ申_二此由_一了。參_レ鴨給之間云々。

此日大夫史祐俊持_二来檢非違使問日記_一〈藥師寺快増并証人蓮能等対問記〉云、奉行行弁依_レ暇不_レ被_二出仕_一。仍可_二持參_一之由所_レ

被_レ申候_一也者。即付_レ蔵人少納言基綱_一云々。返答云、今明之間早可_レ奏聞_一候也。抑平野社司申_レ愁事、昨日奏下已了。令_レ檢非違使停止_一者、上新中納言也者。子細見_レ華五日記_一。

史料『帥記』承曆四年閏八月二十五日条

殿下御_一坐四条宮_一云々。仍未刻許參_レ彼宮_一〈賀茂院〉。御命云、欲_レ示_レ案内_一之間也。高麗申請請_レ医人_一雖_レ可_レ遣渡_一、聊有_レ夢想_一〈故殿宣云、件医不_レ可_レ遣者〉、申請医人雖_レ可_レ遣渡_一、聊有不_レ可_レ遣由_一、令_レ申已了。仰詞如何。至_レ于返牒_一被_レ仰_レ匡房_一云々。予申云、陣定之日不_レ可_レ遣由定申人々多候。大略以_レ其趣_一可_レ被_レ仰敷。上古彼国申請事等不_レ被_レ必裁許_一時候云々。天慶年中彼国王愁申由、其間記等所_レ見候_一也。御報云、件記在乎。申云、候也。又御命云、然者只今可_レ帰向_一敷。随_レ身其記_一可_レ被_レ来者、随渡給了。予退出。随_レ身天慶牒等并刀伊弉時・永承六年牒案等_一參入。殿下出逢給。即献_レ此文_一了。御命云、件仰詞可_レ書出_一。予申云、是大事候。又々令_レ議定_一給、随_レ仰詞_一可_レ書出_一候者也。又宣云、猶可_レ書出_一。大略愁注出令_レ覽了。次申云、清書可_レ献候者。御命云、然者今夕可_レ送者。次又渡_レ四条宮_一給了。予退出。臨_レ昏注_一出仰詞_一、送_レ中務少輔広綱許_一了。返報云、御覽可_レ申_レ左右_一者。

史料『水左記』承曆四年閏八月二十六日条

晴。辰剋浴。參_レ詣賀茂_一〈衣冠〉。奉幣之後午剋許帰。未剋許匡房朝臣来。相次蔵人弁伊家送_レ書云、只今可_レ參入_一。有_レ所_一定申_一事_一之故口者。答_レ可_レ參入_一之由_一了。申初參内。此間右府被_レ參。相次人々參入。右府以下着陣。被_レ下_レ越前国解_一〈大宋国使黄逢随_レ身牒状_一參着了。副_レ牒状案等_一〉。仰云、大宋人黄逢随_レ身牒状_一来_レ着太宰府_一。不_レ經_レ幾程_一解纜飛帆、又来_レ着越前国_一。件牒状直自_レ彼国_一可_レ令_レ伝進_一敷。又尚追_レ遣太宰府_一、自_レ彼可_レ令_レ進敷奈何者。諸卿定申云、追_レ遣太宰府_一之後令_レ進_レ牒状_一

者、往反之間及_レ明春_一歟。於_レ牒狀_一者令_レ□□国司取進。至_レ于黄逢_一者返_レ遣彼府_一。或亦相分_レ定申旨具見_レ定文_一。右兵衛督俊実書_レ定文_一也。

此日中宮行_レ啓野宮_一。今日以後三ヶ月許可_レ休云々。

或人語云、去十日未時怪異。犬画朝餉前庭沙事。同十一、二日三日間同様画之云々。因_レ茲去十四日有_レ御占_一云々。有行朝臣道栄国随等申云、非有奏_レ口舌鬪諍事之輩、依_レ御薬事_一遷_レ御他所_一歟者云々。

今日非返参議師成卿辞状云々。又此日於蚊松被始内御修法<五壇云々>。

史料『帥記』承暦四年閏八月二十六日条

中宮属貞則来云、今夕可_レ有_レ行_レ啓野宮_一。可_レ令_レ献_レ車者。令_レ申_レ承由_一了。申剋許藏人弁送_レ消息_一云、只今可_レ参。可_レ有_レ陣定_一。依_レ有_レ御気色_一也者。答可相_レ扶所劳_一可_レ参仕_一者。臨昏之間参内。先_レ是右大臣・大宮大夫被_レ着陣_一。暫徘徊_レ壁後_一、次着陣。次右大将・春宮大夫・新中納言・別当<此兩人自本籠_一候御物忌_一。為_レ季御読経竟日_一之故也>・左京大夫・右兵衛督参入。右府被下_レ文書_一。越前国司言上存_レ問孫忠_一日記。仰云、大宋国牒状者自_レ越前_一可_レ召上_一歟。猶返_レ遣太宰府_一、自_レ彼可_レ召見_一歟。人々次第見了。右府被_レ示云、件定可_レ書、不_レ可_レ書歟。人々不_レ被_レ申一定_一。右府被_レ命云、奏_レ事由_一欲_レ随_レ仰者、次使_レ藏人弁伊家_一被_レ奏。可_レ書云。依不堪術不候者【史料大成のコメント・・・おそらく脱文有るか】又使_レ伊家_一被_レ申_レ公房申旨_一。仰云、然者右兵衛督可_レ書者。次一々定申。右兵衛督定申云、猶遣_レ西府_一、自_レ彼可_レ召_レ彼牒_一者。左京大夫・別当・新中納言同_レ之。次予申云、如_レ此客徒来_レ着太宰府_一、請_レ彼存問_一。随_レ其言上_一被_レ定例也。而以_レ彼府遲沙汰_一、随_レ彼言上_一可_レ見_レ召件牒_一也。然而大国有_レ所_一鬱重牒示。若追_レ遣西府_一、自送_レ日月_一歟。猶召_レ彼牒_一之後、可_レ追_レ遣孫忠於太宰府_一歟。次春宮大夫同_レ右兵衛督_一。次右大将

被_レ申云、被_レ尋_二先々例_一、若無_二其例_一者、猶自_二西府_一可_二召上_一敷。次大宮大夫被_レ同_二予議_一。次右府被_レ同_二右兵衛督_一。次右兵衛督書_レ之。右府被_レ命云、可_レ然者今夜可_二奏上_一者。次右大将被_レ申_二右府_一云、行啓可_レ候。仍可_レ参_二宮御方_一者。右府被_二許諾_一。次別当・新中納言同依_二上卿許諾_一被_レ参。次予又申_下可_レ参_二行啓_一由_上、上卿許諾。仍参_二宮御方_一。

子刻許有_二行啓_一〈奉_レ出_レ車〉。予・新中納言・別当・右兵衛督参仕也。丑刻歸來。

史料『帥記』承曆四年九月二日条

自_レ殿有_レ召者。参_レ殿〈御物忌也。仍自_二東小屋方_一参入〉。令_レ申_二見参_一。仰云、可_レ参_二出居_一。仰云、匡房所_レ進可_レ載_二高麗返牒雜事_一文可_レ見之者。引_二載長徳・承平・天慶・永承等返牒等文_一。申云、此中令_二復問_一給、可_レ被_レ仰_二下載事_一敷。又被_レ仰云、委見_二件文_一。明日午後〈御物忌云々〉招_二匡房於此辺_一、可_レ問_二案内_一〈下_二給匡房所_レ進文、并先日可_レ献高麗牒状等_一〉。退出了。

史料『帥記』承曆四年九月三日条

未刻参_レ殿。依_レ為_二御物忌_一入_レ自_二東小屋方_一。参_二西面_一。遣_レ人云、可_レ参会由於匡房朝臣。有_レ頃匡房参入。令_レ申_二案内_一。予依_レ召参_二出居_一。被_レ仰云、可_レ問_二匡房所_レ注献条之事_一。皆悉可_レ載敷如何者。以_二件献文_一尋_二問案内_一。申云、件事等多可_レ被_レ咎事也。就中長徳之比、高麗・新羅若有_二一咎事_一者。每条可_レ咎之由、有_レ定云々者。即申_二此由_一。殿宣云、依_レ病申_レ医。而不_レ遣事被_レ咎、猶可_二無情_一敷。予申云、尤然候事也。此中以_二必可_レ被_レ咎事_一被_レ載_二少々_一、何事候乎。但召_二可_レ然上達部_一、令_レ人議給可_レ吉敷。仰云、然者明日可_レ來、并同可_レ参由可_レ候_二匡房_一者。退出了。

史料『帥記』承曆四年九月四日条

午後殿御隨身来云、早可_レ参者。即以参入。先_レ是匡房参入。又大_レ大夫外記定俊祇候。予令_レ申_二見参_一。出居読_下經定俊勘_二申高麗牒状_一間日記等_上。

次宣云、暫可_レ侍人々被_レ来者。次大宮大夫・皇太后宮権大夫参入。又左右衛門督被_レ候。次殿下出_二御簾外_一。此間右府被_レ参。次被_レ定_二返牒_一仰詞。先召_二匡房朝臣於簀子_一、令_レ読_二注申可_レ被_レ難詞并外記勘申例等_一。殿下宣云、此事毎条可_レ被_レ咎歟。右府被_レ申云、毎条被_レ咎何事候乎。大宮大夫被_レ申云、只被_レ注_二載違例由_一歟。予申云、此事可_レ被_レ咎事者。若無_二先例_一者、称_二聖旨_一并便付_二商客_一事歟。但聖旨条又々能々可_レ被_レ尋事也。次殿下宣云、不_レ遣_二医錦_一事者、其由可_レ注。右府被_レ申云、被_レ咎_二違例事等_一者、雖_レ不_レ注_二医事_一何難之有乎。私案之、雖_レ為_二一理_一、猶可_レ有_レ其歟。然而強不_二争申_一。次匡房申云、付_二誰人_一可_レ遣乎。殿下宣云、若遣_二王則貞_一者子細語_二示彼朝_一歟。有_二如_レ此往反之輩_一乎。皇太后宮権大夫申云、甚多候者。又宣云、然者可_レ遣_二但人_一之由可_レ被_二仰下_一歟。人々申云、尤可_レ然者。右大将被_レ会。次被_レ仰_二匡房_一云、以_二此人々申趣_一可_レ奏聞_一者。匡房参内。少選帰参云、隨_二人々申_一可_レ候_二返牒_一、至_二于王則貞_一永不_レ可_レ遣_二高麗_一。若窃往反者、可_レ誠_二所由_一之日、可_レ下知_二歟者_一。次人々退出了。

史料『水左記』承暦四年九月四日条

晴。未時許参_二博陸_一<直衣>。此間右大将被_レ参。相次皇后宮権大夫・左衛門督・皇太后宮権大夫・右衛門参入。頃之右相府被_レ参。議定高麗返牒仰詞也。匡房朝臣注出牒□乖礼度之事。一、牒字下不_レ注_二上字_一事。一、不_レ封_レ函封_レ紙事。一、不_レ注_二年号_一注_二巳未年_一事。一、年月下唯注_レ日不_レ注_二一二_一事。一、称_二聖旨_一事。聖旨者宋朝所_レ称也。如本朝□□□歟。非_二蕃国_一所_レ可_レ称。一、不_レ差_レ使事。長徳三年苻云、須_二專国信先達_一大府_一。何脅_二断綆漂流之客_一以行李。啓牒之信事乖_二被制_一云々。永承六年金州返牒

云、專行李以[舟+卷。騰力]信札。而便附_レ商船_レ口数[乘+夫。缺力]云々。事了人々退出。

史料『水左記』承曆四年九月六日条

晴。已剋許藥師寺別当行尊来。予示云、快増法師濫行事、可_レ被_レ問_レ証人仁秀_レ也。而件仁秀口秩何許之者哉。解_レ所帶職_レ令_レ經_レ拷訊_レ哉。又令_レ召_レ進得勢法師_レ。依_レ是綸旨_レ所_レ尋也者。行尊・仁秀為_レ御寺_レ十僧朝夕勤_レ御願_レ之輩也。而事非_レ実犯_レ、以為_レ証人_レ、輒經_レ拷訊_レ頗以不穩歟。又至_レ于得勢法師_レ者、前日檢非違使拷問之庭、同蓮能法師申状了。今亦被_レ召之事、奈何可_レ候哉者。此由示_レ遣奉行弁之者_レ。

午剋許匡房朝臣来。相逢謝遣。晚頭同朝臣書_下送高麗牒乖_レ前例_上事_上。

史料『水左記』承曆四年九月十二日条

晴。未剋許權左中弁匡房朝臣持_レ来高麗国返牒_レ改_レ处分_レ。聖旨非_レ殊俗之可_レ称者。予見之云、殊俗字頗荒涼歟。如何者。匡房朝臣改_レ蕃王字_レ。予之所_レ云有_レ其謂_レ歟。左衛門權佐行家朝臣書_レ送大宋国牒状_レ。黄逢自_レ越前国_レ所_レ進_レ官也。

申剋許大夫史祐俊持_レ来平野社損色文_レ云、奉行弁<師賢>、依_レ輕服事_レ不_レ伝進_レ之由所_レ申也者。秉燭之後向_レ右府御許_レ。良久帰。今夜於野宮有_レ和歌事_レ云々。題云、菊花久芳云々。

史料『水左記』承曆四年九月十七日条

陰雨。午時許博陸以_レ書状_レ被_レ示給_レ云、高麗返牒匡房持来也。相_レ伴西隣相公_レ可_レ光臨_レ也。隨_レ其案内_レ早可_レ奏聞_レ也者。示_レ此旨於相公_レ、答_レ可_レ参由_レ。仍申_レ其旨_レ了。良久与_レ相公_レ同車参_レ博陸_レ。先之、皇后權大夫被_レ参、匡房朝臣持_レ参返牒_レ。趣事人々披_レ見了。博陸令_レ匡房朝臣_レ奏達之。

史料『水左記』承曆四年九月十八日条

晴。已時許匡房朝臣持_レ来高麗返牒草_レ。言談之後、良久退出。
後聞、高麗返牒令_レ前筑後守俊光清書_レ可_レ遣云々。

史料『水左記』承曆四年九月二十四日条

晴。早旦権左中弁匡房持_レ来高麗国広評省牒_レ大口予書写令_レ返与_レ云々。

史料『師守記』貞治六年五月九日条

(上略) 承曆四年十月二日。賜_レ官符於大宰府_レ云、右大臣宣、
奉_レ勅、所_レ請医人、輒難_レ差遣_レ。所_レ送方物、宜_レ被_レ返却_レ。早
以_レ府司之返牒_レ、扱_レ使者_レ發遣。但至_レ商人王則貞_レ者、宜_レ任_レ
法罪科_レ<云々>。(下略)

史料『水左記』承曆四年十月十日条

晴。早旦召使来云、今日可_レ参_レ于不堪田定_レ者。答_レ可_レ参由_レ了。
暫召使又来云、今日定延引了者。
今日維摩会始也。氏弁別当正家朝臣下_レ向奈良_レ云々。
昨日自_レ博陸_レ被_レ給_レ牛。奉_レ長多仁法印_レ了。
已剋許匡房持_レ来高麗返牒_レ。今有_レ加入之句_レ。如_レ牒状_レ者、貴
国和親之義、長_レ垂百王_レ。権盟之後、数愈_レ千祀_レ。繼_レ彼前好_レ、
嘉_レ此来章_レ。而侵_レ霧露於燕寢之中_レ、求_レ医療於鼈波之外_レ者。
予披見之云、改_レ而字_レ書_レ方今両字_レ如何。匡房云、尤可也。即
摩_レ而字_レ令_レ書_レ入方今両字_レ了。今日内覽可_レ奏聞_レ云云。晚頭参_レ
博陸_レ。被_レ示云、高麗返牒能々令_レ覽可_レ被_レ示_レ子細_レ也者。予
申云、此定無_レ別難_レ敷。但令_レ加入_レ之句、已非_レ牒状之詞_レ。而
如_レ書入_レ者似_レ牒状詞_レ。如何可_レ候哉者。

史料『水左記』承曆四年十月十一日条

陰晴不_レ定。寒風飄々。已剋許匡房朝臣持_レ来高麗返牒_レ。予取留

之。招西隣前都督相共見之。殊無□□替事。仍晚頭隨身予持參博陸。申事之子細了。退出。

史料『水左記』承曆四年十一月二日条

晴。已剋許參博陸。被示云、前日匡房朝臣持來高麗返牒。□□句尚可上下也。其由可被示者。頃之退出。

此日尼上御方被供養涅槃經。朝夕兩座也。朝座講師定快律師。布施長絹五疋・僧膳代米十二石。夕座陽慶。布施長絹五疋・米十石。件經尼上年來之間手自所被書写也。始自今日二十ヶ日可被行講演也。每日兩座也。先之被供養鏡藥師仏并同經七卷・千手經一卷。講師明胤。有布施。長絹一疋。

今夜請三口〈行尊・定秀・範命〉。□□大般若經。御前□□給之故也。

入夜為方違向隆尊阿闍梨一条富小路房。及鷄鳴歸。此間雨脚滂沱。

史料『水左記』承曆四年十一月三日条

陰晴不定。朝間雨降。未剋以後晴。已剋許匡房朝臣來。令直牒狀。又示子細了。今日書直可持參博陸者。

左大弁送書狀云、今日主上還御內裏之間、人々可給事可候者。若下藹浴恩者無極愁也。此旨可被申殿者。予□□明日依被示旨令申子細了。又々可驚申也者。秉燭之後、着束帶參內〈堀川院〉。今夜令還入大內給也。先之右大臣參入被行召仰事。次第儀式如常〈從三位藤原実政。坊官賞云々。源俊実、從四位上藤原定俊、家司。從四位下源□□〉。臨幸了退出。御竈神上左衛門督也。行□之後更□□供奉云々。此日新中納言〈宗俊〉。勅授帶劍。

史料『帥記』承曆五年五月二日条

召使來云、昨日陣定延引。今日可參者。申時許參內。者是內府・

大宮大夫・新中納言・左兵衛督・左京大夫・左大弁参着陣座。其後右大將・春宮大夫・左衛門督本自日候内。参入。内府被下文書。件書調度文書極多。忽難見書。仍人々或見大略、或不見之。明法博士有真重勘申尾張国司目代高季罪名事。大宋国皇帝被獻物可有答信否、并其返牒可何樣事乎事。又太宰府申請遣高麗返牒等事。又前大弍經平事等也。春宮大夫者經平事以前退出了。曉更事了。左大弁執筆。

史料『朝野群載』卷二十 異国

日本国大宰府牒 高麗国礼賓省

却廻方物等事

牒、得彼省牒僞、当省伏奉聖旨、仍收領疋段麝香者。如牒者、貴国犯霧露於燕寢之中、求医療於鼇波之外、望風想德、能不依々。抑牒状之詞、頗睽故事。改处分而曰聖旨、非蕃王可称。宅遐陬而跨上邦、誠彝倫攸斁。況亦託商人之旅艇、寄殊俗之单書、執圭之使不至、封函之礼既虧。双魚猶難達鳳池之月、扁鵲何得入鷄林之雲。凡厥方物、皆從却廻。今以状牒、々到准状。故牒。

承曆四年 月 日

史料『本朝統文粹』卷第十一 牒

日本国太宰府牒 高麗国礼賓省

却廻方物等事

牒、得彼省牒僞、当省伏奉聖旨、訪聞、貴国有能理療風疾医人。今因商客王則貞廻帰次、仰、因便道牒、及於王則貞处、說示風疾緣由。請彼处、選扱上等医人、於来年早春、發送到来。理療風疾、若見功效、定不輕酬者。今先送華錦、及大綾・中綾各一十段、麝香一十臍、分附王則貞、賚持將去知大宰府官員处、且充信義。到可收領者。牒具如前。当省所奉聖旨、備録在前。請貴府有端的能療

風疾、好医人、許容發送前來、仍収領疋段麝香者。如牒者、貴国権盟之後、數逾千祀。和親之義、長垂百王。方今、犯霧露於燕寢之中、求醫療於鼇波之外、望風懷想、能不依々。抑牒狀之詞、頗睽故事。改处分而曰聖旨、非蕃王可稱。宅遐陬而跨上邦、誠彝倫攸斁。況亦託商人之旅艇、寄殊俗之單書、執圭之使不到、封函之礼既虧。双魚猶難達鳳池之月、扁鵲何得入鷄林之雲。凡厥方物、皆從却廻。今以狀牒、々到准狀。故牒。

承曆四年 月 日

史料『江談抄』第五一七三 都督自讚事

被命云、倩案物情、云官爵云福祿、皆以文道之德所經也。何況才芸名譽殆過於中古之人所思給也。雖似自贊又非無謂。於壽命者及七十事、近代之難有之事也。非短壽之類。顏回至聖僅三十歟。仍世間事全無所思シ。只所遺恨<ハ>不歴歳人頭<ト>子孫<カ>和呂クテヤミノルトナリ。足下ナトノ様ナル子孫アラマシカハ、何事ヲカ思侍ラマシ。家之文書、道之秘事、皆以欲煙滅也。就中史書・全經秘説徒<ニテ>欲滅也。無委授之人。貴下<ニ>少々欲語申。如何。答云、生中之慶、何以如之乎。被答云、史記爛脱<ハ>只三卷也<本紀第一、第四、第五伝也>。後漢書<ニハ>廿八將論也<共有注有別紙>。被談云、菅三品所被作老閑行、能被心得如何。答云、未得心。但粗依先父之談説、纔置文字之様所承知也。自昼夜各一字、可至數十、廿之字歟<云々>。被談云、然也。譬如扇本末也。件行<ハ>文時<乃>三ケ年之間、時而懈所案作也。草之後先令見順許之處、順見之、一夜之中令和令送文時許<云々>。文時大令歎示給不覺人之由。時人又以難之傾之。其故<ハ>不体凡、只無念也。又無其憚。一々遺恨也。又被談云、文時<モ>頗順<ヲハ>不受<ケル>歟。順所作河原院賦<ヲ>文時見<天>云、文体無過失歟。但賦体ニ

ハアラス。自_レ中間_ニ之奥ハ已非_レ賦之文章_{ナリ}。〈ナニワサシタルソト〉被_レ云_{ケル}。〈サ天〉此賦我見_クト順_クニハ不_レ令_レ聞_クトソ被_レ云_{ケル}。

史料『江談抄』第五一七四 都督自讚事

都督又云、取_レ身自賛有_ニ十余_ニ。其中、八歳通_ニ史記_ニ〈四歳読_レ書〉。十六歳作_ニ秋日閑居賦_ニ。其一句云、李広漢室之飛将也。ト宅_ニ於隴山_ニ。范蠡越国之賢相也。避_ニ禄_ニ於湖水_ニ〈云々〉。明衡朝臣深以感之。又落葉埋_ニ泉石_ニ詩、羊子碑文嵐裏隱。淮南藥色浪中深_ク云々。安樂寺御殿鳴序一句曰、堯女廟荒、春竹染_ニ一掬之涙_ニ。徐君墓古、秋松懸_ニ三尺之霜_ニ雖。雖_レ垂_ニ異代之名_ニ、皆非_ニ同日之論_ニ〈云々〉。又云、自_レ高麗_ニ申_ニ醫師_ニ返牒云、双魚猶難_レ達_ニ鳳池之月_ニ、扁鵲何得_レ入_ニ鷄林之雲_ニ。是則承暦四年事也。其後赴_ニ鎮西_ニ之日、宋朝賈人云、宋天子有_ニ鍾愛賞翫_ニ之句、以_ニ百金_ニ換_ニ一篇之句_ニ也。

史料『続古事談』卷二 十二話

むかし、高麗国王、悪瘡をやみて、日本の名医雅忠を給はらんと申たりけり。此事、陣のさだめに及て、さまゞに沙汰ありけるに、帥大納言〈経信〉申云、高麗の王、悪瘡やみてしなん、日本のためなにくるしといはれたりける一言に事定まりて、つかはずべからずと云事に成にけり。さて返牒いかゞいふべきといふさだめには、此事、え申さじをさず、といふべしとて、匡房卿、其状をかきけるに、申とをさぬよしをかきおぼせずして、二たびまでかへされにけり。第三度に双魚難_レ達_ニ鳳池之月_ニ、扁鵲何入鷄林之雲と云秀句かきたりけるたび、めでのゞしりてつかはされにけり。後に彼国の商人来けるが、此句を紳に書してこそ来りけれ。人ごとにかくかきてもたるとなん云ける。

史料『古今著聞集』卷第四 文学第五 大江匡房高麗への返牒に秀

句の事

白河院御時、高麗国より医師を申たりけるに、つかはすべきよし沙汰ありけるに、殿下御夢想の事ありて、つかはすまじきになりけり。返牒を匡房卿かきけるに、双魚難_レ達_ニ鳳池之波_ニ、扁鵲豈入_ニ鷄林之雲_ニ。この句ことなる秀句にて、よの人ほめのりけり。

史料『十訓抄』上 一の二十一

(上略) 唐の後、悪しき瘡いでき給ひて、その国の医師、力及ばざりければ、日本に雅忠というふ、いみじき医師ありと伝へ聞き給ひて、これを渡さるべき由、唐の帝より申し送り給へりけるに、やりやらずのこと、公卿の御定めありけり。人々申すやう心々にて、定まりえざりけるに、帥民部卿経信卿、とばかり待たれて参りて、ことの次第聞きて、唐の後の死なむ、日本になに苦しと、ただ一言いはれたりければ、この意見に付きて、渡さるまじきに定まりにけり。

さて、その返牒は、匡房承りてぞ書かれける。

双魚難_レ達_ニ鳳池之浪_ニ 双魚、鳳池の浪に達し難し
扁鵲豈入_ニ鷄林之雲_ニ 扁鵲、豈に鷄林の雲に入らむや
この句をば、和漢ともにほめかへりけるとぞ。

昔、反正天皇、かくれ給ひて後、御弟の允恭天皇、いまだ皇子におはしける時、久しく篤疾にしづみ給へりけれども、群臣、あながちにすすめ申すによつて、位につき給ひにけり。そののち、使を新羅に遣はして、かの国の医師をむかへよせて、御病をつくるはるるに、ほどなく愈えにけり。ことに賞し給ひて、本国へ帰しやられけり。

そのためし、聞き及び給ひて、異国よりも申し送りけるにや。

史料『延慶本 平家物語』三一二十一 小松殿熊野詣事(汲古書院本)

(上略) 近於_ニ本朝_ニ者、三条院ノ御時、典薬頭雅忠ト云医

師アリキ。難くキ癒病ヲイヤシ、難くキ生命ヲ生シカバ、時ノ人、薬師如来ノ化身歟、将又耆婆ガ再誕歟ト疑フ。身ハ本朝ニ居ナガラ、名ヲ唐朝ニ施シケリ。其比異国ノ后悪瘡ヲ煩フ事歳久シ。時ニ異国ノ名医等医術ヲ究メ雖致くト療治くヲ効驗ナカリシカバ、雅忠ヲ可被渡之由、異国ノ牒状アリ。本朝希代ノ勝事タルニ依テ、公卿僉議度々ニ及ブ。凡ソ大国ノ請ニ預ル事、本朝ノ珍事、雅忠ガ面目也。雖然渡唐ハ全ク不可然。夫医療ニ無効驗者、本朝之恥辱也。医療ニ有得驗者、大国ノ医道此時ニ永可絶くヌ。就中他国ノ后死ム事、本朝ノ為くメ何ノ苦ミカ有ベキト、帥民部卿経信卿ノ意見ニ定メ申サレケレバ、尤トテ、渡サルマジキニ成ニケリ。其時江中納言匡房卿、大宰権帥ニテ宰府ニ止住之間、依有僉議不及上覧くニシテ、私ニ可有返答之由被仰下ケレバ、匡房牒詩ニ云ク、

双魚未くダ達鳳池之波くヲ、扁鵲豈くニ入くンヤ鶴林之雲くニ

トカキテ、被渡ニケリ。凡ソ此条、和漢両朝ノ感歎アリケルトカヤ。但シ昔くシ仁徳天皇ノ第四御子反正天皇崩御之後、允恭天皇未ダ皇子ニテ御坐シ時、久ク篤疵ヲナヤミ給ケルヲ、群臣強ニ勸メ申ニ依テ、御即位有ケリ。本朝ノ医師術尽ニケレバ、其後御使ヲ新羅国エ遣シテ、彼ノ国ノ医師ヲ迎ヘテ、御悩ヲ治セサセ御坐ケルニ、無程イヘニケレバ、殊ニ是ヲ賞ゼサセマシタマテ、被返くシ送ニケリ。是則本朝第一ノ不覺、異朝無並ノ嘲弄也。彼ノ例ヲ聞及テ、異国ヨリモ典薬頭雅忠ヲモ可被渡くサ之由強ニ申送ラレケルト聞ヘシカドモ、江中納言ノ計申サル々旨、無左右カリケレバ、不被渡シテ止ニケリ。（下略）

以上